磯（いそ）　部（べ）　彰（あきら）

学位の種類　文学博士

学位記番号　文第66号

学位授与年月日　平成3年3月7日

学位授与の要件　学位規則第5条第2項該当

学位論文題目　「西遊記」形成史の研究

論文審査委員　（主査）
教授 村上哲見　教授 寺田隆信
教授 中嶋隆蔵

論文内容の要旨

本文目次

序

第一章　唐前半期における唐三蔵伝説の発生とその拡散

第二章　唐後半期における四川・西北地方の唐三蔵西天取経伝説

第三章　唐代の密教文化に見える唐三蔵西天取経伝説

第四章　宋代における唐三蔵西天取経物語の成立と江南文化

第五章　「元本西遊記」の形態について

第六章　「元本西遊記」と虞集撰「西遊記原序」
——丘処機の事蹟をめぐって——

第七章　孫悟空像の形成とその発展

第八章　猪八戒像の形成とその発展

第九章　唐太宗入冥物語と陳光蘂江流和尚物語

第十章　『楊東来先生批評西遊記』劇の成立とその刊行

―― 明前期の西遊記物語について ――

第十一章　『迎神賽社礼節伝薄四十曲宮調』に収められる「西遊記」隊舞
第十二章　明後期における『西遊記』の大成とその流布
第十三章　清代における『西遊記』の戯曲化と絵画化
第十四章　清代の『西遊記』と民間芸能
ま　と　め

(一)

明代における「四大奇書」の成立は、中国文学史の上で特異な色彩を放つ出来事である。

「四大奇書」の筆頭に位置する『三国志通俗演義』は、乱世のもとでの将相・幕客の野心を余すところなく描き出し、『水滸伝』は、官界の腐敗による圧政にさらされた胥吏・農民の処世術を描き出した。『金瓶梅』は『水滸伝』にその源泉を仰ぎつつ、一夫多妻の制度のもとに置かれた豪商の妻妾たちを主人公として、彼女たちの極めて人間的な感情の織りなすあやを克服に描き出した。そして、『西遊記』は、菩薩道を確立するために求法巡礼の旅に出た修行者の刻苦する姿と、その根底にある人間のあるべき姿を、破格な表相を借りて表出したのである。

これらの、中国文学をそれぞれの一方で代表し得る奇書を中心とした小説群は、かつて士大夫からは、表面上、「文学」とは見なされなかった。しかし、実際は、読書人を主体とする多くの人々の参与と支持のもとに、長い歳月を経て、躍動感ある長編小説へとまとめ上げられて行った。そして、広範な受容を通して中国人の心底深く染み渡り、ついには中国文化を根底で支える一大要素となったのである。

それゆえ、小説、とりわけ歴代小説の代表格である奇書群の性格が明らかにされることは、中国小説の特色、延いては、広く中国文化のあり方さえ明らかにすることも可能であろう。

本研究で取り上げる『西遊記』は、その奇書の一角を占め、特異な発展を経て、今日見られるような長編小説となったものである。しかし、その成立の過程は、極めて複雑で、『三国志通俗演義』・『水滸伝』・『金瓶梅』の各研究が進展するのに反し、なお十分な解明はなされていないのが現状である。従って、まずもってその形成史の研究こそが、「四大奇書」、或は中国文学研究において、最も肝要なことであろう。

筆者は、世界に散在する宋明清の各時代の『西遊記』関係諸版本の調査と整理による内容分析、『西遊記』登場人物の研究、歴代の諸文献に留められる『西遊記』資料の発掘、或は仏教文化と中国小説との関係の検討などを通して、『西遊記』形成史の総合的研究を行なって来た。その研究結果が、ここに提出する「『西遊記』形成史の研究」である。その内容は、第一章「唐前半期における唐三蔵伝説の発生とその拡散」から第十四章「清代の『西遊記』と民間芸能」までの全十四章から成り、その考察を通して、唐初の玄奘三蔵の史伝が虚構化され、宋代に『大唐三蔵取経詩話』に

まとめられ、やがて明後期に世徳堂という書肆が大成本『西遊記』を完成させ、これが、後世に受け継がれて改編され、各階層に広く浸透する過程を明らかにする。

本研究—「『西遊記』形成史の研究」—の概要を記せば、以下の如くである。

（二）

『西遊記』は、古くより密教の影響を受け、その象徴主義を借りて、求法者の覚醒、延いては読者の悟道を説くという一面をもつ。その旨意を具体的に説明するために、人間玄奘三蔵を唐三蔵、孫悟空、猪八戒、沙悟浄の四者に分化せしめ、人間のもつ様々な感情・智恵・勇気・迷いなどを主人公を通して具象化した。他方、作品の旨意をより広く伝え、また、娯楽としても楽しめるように、作者は作品構成に様々な趣向をこらした。表現においては、綺語麗句を頻用して伝統的古典文学の雅なる要素を物語に盛り込むとともに、「常言」（ことわざ）の使用によってそれを日常的な世界に近づけたりもした。物語の展開においては、人々が常日頃心に懐く希望・夢・好奇心などが何らかの形で叶えられるように、神魔・霊怪要素以外の、講史小説的要素・公案小説的要素・人情小説的要素・煙粉小説的要素などを、一ひねりした形で取り込む。そして、くり返し登場する妖怪と悟空らの法術競べのパターン性に食傷しても、史実に拠る玄奘三蔵の事蹟の認識、取経事業の必然性に対する論証という楽しみ、或は、勧善懲悪による爽快感の獲得などが出来るように、物語には用意周致な配慮がなされている。

このような様々な趣向が施されている『西遊記』ではあるが、先述のごとく一朝一夕に出来上がった作品ではなかった。その成立までには、おおよそ九百五十年を要していた。

（三）

『西遊記』の源泉は古く、唐のはじめ、玄奘三蔵の帰国時の「街談巷語」に遡る。その当時の風聞のたぐいは、やがて雲散霧消して行ったが、一部残ったものが玄奘三蔵の伝記である『大慈恩寺三蔵法師伝』などと結合し、唐三蔵玄奘をめぐる伝説を形づくるようになる。それは、玄奘の遺蹟（大雁塔など）や遺品（大唐三蔵聖教序碑拓本など）の媒介をうけて徐々に広まっていったらしい。唐の中頃にあったと思われる伝説には、密教系の仏画「般若（釈迦）十六善神図」に留められる伝説、つまり唐三蔵が取経の旅の最中、深沙神を教化したという話、或は、中唐の詩人戴叔倫が「行脚僧に贈る」詩で詠み込んだ故事——玄奘が西天へ出立する時、宿房の松に自分の帰国を示す「しるし」をつけた松の伝説——などといったものが今日になお残る。（以上、第一章）

唐の後期に入って、都長安が戦乱に巻き込まれると、唐の文化を維持する地域は、辺境の蜀地や江南へ移って行った。中でも蜀地は、玄奘三蔵が足跡を残した土地柄もあってか、唐三蔵伝説の重要な生成地であった。唐初の、西天出立以前にこの地で心経を病僧から伝授されたという伝説をはじめとして、数多くの唐三蔵伝説が今日に伝えられている。その内、今日の『西遊記』とは無関係な形で伝承されるものもいくつかある。例えば、従来あまり注意されていないけれども黎州の役所

にある梨樹は、唐三蔵が西天へ旅立つ時、手にしていた梨杖を記念のために挿して残していったものが、やがて芽ぶいて大きくなったもの（『大明一統志』巻73）だとか、唐三蔵が蜀の宝研谿を通って帰国する折に、そこで拾った石を磨いて硯にしたところ、五色の光を放った（『汪氏珊瑚網』「書憑」巻22）などという伝説が、その発生年代は定かではないが、古くから蜀地に伝えられている。（第二章）

蜀とは別に、この時代の敦煌で発見された「宝勝如来図」という仏画がある。当画は、松本栄一氏（『燉煌画の研究・図像篇』）や秋山光和氏（「敦煌画＜虎をつれた行脚僧＞をめぐる考察」、『美術研究』238）に詳しい紹介があり、松本氏は行脚僧をダルマターラに比定するが、秋山氏は玄奘ともダルマターラとも決めかねている。筆者は、『西遊記』形成の過程から考えて、画中の行脚僧を玄奘三蔵と見なしてよいと思う。この仏画には、玄奘三蔵が老虎をつれて取経の旅をし、その功業で宝勝如来に成仏したという伝説が留められている。宝勝如来は密教系の尊仏であり、唐三蔵がこれに関係づけられることは、「釈迦十六善神図」に見られる唐三蔵伝説とともに、唐代、密教文化が唐三蔵西天取経伝説に干与していたことが推測される。また、宝勝如来仏画に虎を伴うことは、唐三蔵が初めてインドから猫をつれてきたという伝説と関係があるのかもしれない。また、江南の揚州寿寧寺には、玄奘取経壁画が経蔵院に描かれていた（『欧陽文忠公集』巻125）と言われる。（第二・三章）

五代十国を経て宋代に入ると、唐三蔵伝説は南京を含む江南地方の諸伝説と結合して、一つの体系だった物語へと発展して行く。元来、唐三蔵玄奘とは縁の薄かった江南地方ではあったが、北宋の天聖五年（1027）、長安の興教寺唐三蔵から運び出されていた玄奘三蔵の頂骨が、南京の報恩寺（当時、天禧寺）に改葬されたことを契機として、宋以降、唐三蔵ゆかりの地は、仏教文化が間断なく栄えた江南地方へ移って行った。

もともと、江南地方は、六朝時代より寺院が甍を並べ、内外の高僧が参集して、しかも歴代の廃仏より免れ得た情況もあって、多くの仏教説話の生成地となっていた。中でも、杭州西湖の古刹霊隠寺には、インドから来た高僧慧理が、同じくインドより飛来して来た霊鷲山の一小山の洞内から、自分の侍者であった白猿・黒猿を呼び出し、飛来峰のいわれを説いたという呼猿洞伝説（『咸淳臨安志』・『霊隠寺誌』巻一）が、その創建当初からあったらしい。唐末まで、唐三蔵の護衛は老虎であった（「宝勝如来図」）のであるが、宋代になって霊隠寺のある杭州（臨安）で刊行された『大唐三蔵取経詩話』では、唐三蔵の徒弟・護衛者は猴行者になっていることから考えると、当地の著名な呼猿洞伝説が、唐三蔵の護衛者の変更に一定の影響を持った可能性がある。これは、西天取経に「さる」が登場する理由を解明する上で、重要な意味を持つであろう。

宋代の唐三蔵伝説は、前代の片片たる逸話の域を脱して、すでに体系化された物語 ―― 『大唐三蔵取経詩話』 ―― の段階に入っていた、と見るべきである。それゆえ、その流布も広範に亘り、最古の史料である『游宦紀聞』巻４には、福建省永福県の張聖者なる者が輪蔵の讃に唐三蔵が猴と白馬を伴って西天へ行ったというこの物語を詠みこむ記事を留める。このことから、北宋末から南

宋初には、江南の南、福建地方で知られていたことがわかる。福建が宋代、代表的出版地であり、かつ、日宋貿易の中心地であったことを思えば、高山寺に『大唐三蔵取経詩話』（臨安の刊本）と共に将来された『大唐三蔵法師取経記』の方は、或は、閩版かもしれない。西夏の楡林窟第二・第三窟にも、唐三蔵と猴行者・白馬を描く唐三蔵西天取経壁画が残ることから、西北地方にも早くから流伝していたことがわかる。かつて、鳥居龍蔵氏が見た遼代「西遊記」レリーフも、或は、『大唐三蔵取経詩話』に基づくものとも考えられる。この作品は、小川貫弌氏（「大唐三蔵取経詩話の形成」、『龍谷大学論叢』362）及び志村良治氏（「大唐三蔵取経詩話訳注〔一〕〔二〕」、『愛知大学文学論叢』19・21）により、詳しい内容の紹介が行なわれ、のち、太田辰夫氏（『西遊記の研究』）が詳しい内容分析を行なっている。筆者は、これらの研究成果をふまえつつ更に検討を進めた。

『大唐三蔵取経詩話』の特徴は、密教文化の中で発展して行った唐三蔵伝説を継承している点、『大唐西域記』などの玄奘三蔵と関係が深い地理書や史伝類を作品構成の拠り所としている点、玄奘三蔵とは元来関係のなかった民間伝説を利用している点、などにある。この作品には、西夏や日本の仏画等に留められると同じように、孫悟空の前身である猴行者、沙悟浄の前身である深沙神が登場し、後世の『西遊記』の初歩的な骨格が出来あがっていた。（第四章）

『大唐三蔵取経詩話』は、本来、唐三蔵伝説とは関係のない江南地方に伝わる猴王神（『福州猴王神記』）・白猿伝（『補江総白猿伝』）などの民間伝承を吸収し、やがて「元本西遊記」へと発展して行く。元代には、小説系統の「元本西遊記」と、戯曲系統の「唐三蔵西天取経」劇（呉昌齢撰）があった。両者とも後に散佚してしまったが、前者は高麗時代の『朴通事』、朝鮮朝初期の『老朴集覧』という中国語会話書に一部が引用されている。後者は、明末の選曲集『萬壑清音』に残二折が収録されており、元代の西遊記物語を考える上で、重要な資料である。

「元本西遊記」は『西遊記』の原形をなし、その作品規模こそ小さいものであったらしいが、後世著名な登場人物はあらかたその顔をのぞかせている。主人公は唐三蔵から斉天大聖孫吾空に移り、その形象には福建の白猿伝の系譜下にある妖猿斉天大聖伝説や密教の大力金剛菩薩像などの影響を窺い得る。一方、宋代に登場した深沙神は、色目人の僧侶や喇嘛教の護法神をモデルにしつつ、第二番目の弟子沙和尚となった。そして、第三番目の弟子に加えられた朱八戒は、猪というイメージ（陳寅恪氏「西遊記玄奘弟子故事之演変」、『国立中央研究院歴史語言研究所集刊』２－２）、猪をめぐる怪奇談（太田辰夫氏『西遊記の研究』）などから、その出自をあいまいな形で考えられて来た。しかし、筆者は、『楊東来先生批評西游記』に基づいて、密教系の摩里支天菩薩の猪をモデルに「元本西遊記」の段階に生み出された登場人物であったと考え、その形象確立には密教、ことにチベット密教である喇嘛教の影響を強く受けているものと見なした。これは朱八戒に限ったことではなく、「元本西遊記」全体（例えば、登場する妖怪など）についても言えることである。「元本西遊記」が散佚したことは先に述べた通りであるが、そのために幾つかの問題を後世に生じさせることになった。その一つは、清初の『西遊証道書』に初めて現われる、いわゆる虞集の「西遊記原序」が、果してそれに付けられていたかどうか、という問題点である。魯迅の虞集序に対する錯認を指

摘して、この序の価値を積極的に認めた太田辰夫氏は、「元本」西遊記研究上、不可欠の資料とされる（「西遊証道書考」、『神戸外大論叢』21－5）。しかし、一見、矛盾の見えない虞集序ではあるが、元代の虞集関係文献や道教史と即応させて考えると少なからぬ疑問がある。まず虞集自身の出身地の書き方に疑問が感じられる。虞集は往々にして、自分の本貫地である蜀を出身地とする。ところが虞集序は、寓居の地である臨川を記し、極めて特殊な書き方になっている。また、序文が記す「元本西遊記」の量的規模などは、当時の資料から推定される規模とへだたりが見られ、その記述に疑問とすべき点が窺われることから見て、これは、おそらく「元本西遊記」にはなかった後世の偽作であろうと考えられる。従って、元代の西遊記物語には道教色が濃いと指摘する虞集序が「元本西遊記」に及ぼす影響はないと見てもよいと思う。（第五・六・七章）

「元本西遊記」の成立によって、従来の中国にはなかった神怪小説のもつおもしろ味が唐三蔵西天取経物語に加味され、それと玄奘三蔵を教祖の一人に据える慈恩宗の教勢の拡大とが相まって、物語が広い地域に流布して行ったらしい。従来の研究では注意されたことがなかった元代のチベット密教と慈恩宗は、西遊記物語の発展と流布には、欠くことの出来ない要素であった。また、敦煌変文の系統を引く「唐太宗入冥」物語、或は「陳巡検梅嶺失妻記」と金山寺江流説話とを併せて作った「陳光蘂江流和尚」物語も、この「元本西遊記」に取り込まれていたと考えられる。沢田瑞穂氏は、「陳光蘂江流和尚」物語の原型は金山寺をめぐる漂着神信仰にあるとし、それが元末明初の金山寺長在禅師の伝説を介在として玄奘三蔵に付会された（「唐三蔵の出生説話について」、『福井博士頌寿記念・東洋思想論集』）と考えられた。元・呉昌齢の「唐三蔵西天取経」劇に既に「陳光蘂江流和尚」物語があることから、長在禅師経由説は誤りであるが、物語の原型の一つには沢田説の金山寺漂着神伝承があると考え、この点を受けて上述のように結論づけた。（第九章）

（四）

明代に入ると、王朝の内戦などの社会的事情から小説に統制が加えられ、その情況を受けて「元本西遊記」は多少の改訂を受けたと推測される。この時期の西遊記物語は、『永楽大典』巻13139に魏徴が夢に涇河の龍を斬る一段を留めるが、それから見てかなり後世の『西遊記』に近いプロットが確立していたように見える。また、同じ頃、楊景賢によって長編の戯曲も作られた。『伝奇四十種』の一つ、『楊東来先生批評西游記』がそれである。孫楷第氏は十分な資料から6巻24齣がすべて楊景賢の手に成る（「呉昌齢与雑劇西遊記」、『輔仁学誌』8巻一期）と考えられ、これに対して太田辰夫氏は楊東来の加筆を想定（『西遊記の研究』）された。このように意見の分かれるところであるが、筆者はこの戯曲の内容を小説西遊記と対比することによって、孫楷第説を追認し、すべて明前期の楊景賢作と考える。仮りに、明前期よりは時代が降るにせよ、少なくとも世徳堂刊本に先行する作品（物語）であることは確かであろう。これらの作品から、西遊記物語は、孫悟空・沙和尚・朱八戒を主人公とする作品に発展していたことが知られる。（第十章）

明の中期、旧本西遊記は戯曲作品を含めて一定の流布をしていたらしく、『盛世新声』（正徳序）

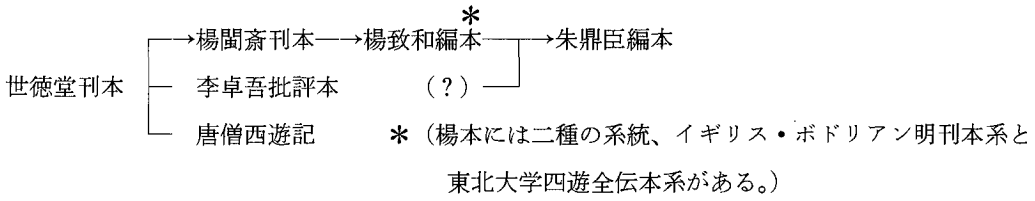
には、「火猢猻」が鉄鎖を引きちぎり、斬龍も行なわれたという曲詞を収める。また、明代の無為教の始祖である羅祖（無為居士、嘉靖六年歿）が著わした五部六冊（『苦功悟道巻』一冊・『嘆世無為巻』一冊・『破邪顕証鑰匙巻』二冊・『正信除疑無修証自在宝巻』一冊・『巍巍不動泰山深根結果宝巻』一冊）の一つ、『嘆世無為巻』には、唐三蔵師徒の取経故事が取り入れられている（沢田瑞穂氏「羅祖の無為教」、『増補宝巻の研究』）。他の宝巻にも、教化の素材として用いられ、宗教界の受容の広さが知られる。また、書目にもその名が記され、『晁氏宝文堂書目』の「楽府」項には戯曲の「西遊記」が、『古今書刻』上編の「山東魯府」項には「西遊記」が記される。これは、おそらく王朝が戯曲文学までを公認していたことなどから考えると、戯曲であろうと思われる。呉地方では、「社」の祭礼に「西竺取経」劇が演じられていたと言われる（『王穉登集』巻四）。『楊東来先生批評西游記』が内府承応戯のような形式をとること、明中期にこの戯曲西遊記の流布を伝える「勾呉・蘊空居士」總論をもつことなどと考え併せると、戯曲形式の「西遊記」はかなり広範に行なわれていたように思える。一方、同じ頃流布していた二郎宝巻（嘉靖年間刊）にも、『西遊記』故事が詳しく引用されるが、その依拠したものは小説であったように見える。

このような古い段階の西遊記物語の姿を伝える資料は断片的で、物語の全体像はつかみにくいが、それらを含めて最も重要な文献は、近頃山西省長治市で発見された『迎神賽社礼節伝簿四十曲宮調』（萬暦二年鈔写、礼節薄と略称する）であろう。その中には、多くの戯曲・小説資料が見られるが、『西遊記』に関しては、「巡河龍王難神課先生一単」・「唐僧西天取経一単」などの隊舞戯演目が留められる。その項目名を後の世徳堂刊本『西遊記』と比較すると、一致するものが少なくなく、後者の登場人物の過半数を数えることが出来る。ただし、前者と後者とは、登場順序において異同が見られる。このことから、遅くとも嘉靖・隆慶期において、世徳堂刊本に近い西遊記物語が一定の流布を見、しかも隊舞戯という奉納芝居に改編されていたことが知られる。

礼節簿の発見は、また、作者問題にも重要な波紋を投げかけた。つまり、従来から根拠薄弱な形で主張されて来た呉承恩が小説西遊記を著わしたという説は、かなり弱められた（呉承恩の「西遊記」が輿地類に分類される、旧本西遊記（小説）が元末明初に既に存在したことなど）のではないか。かつて、太田辰夫氏は、多少の含みを残しながらも、『西遊記』呉承恩作者説に強い疑念を示された（『西遊記の研究』）。筆者も、太田説に目録学の立場から賛同し、さらにこの礼節簿の存在によって確信を強めることとなった。と言うのは、もし仮りに淮安の呉承恩が「西遊記」を著わし、それが山西地方へ伝わり、礼節簿の隊舞戯に利用されたとすれば、それより現行の『西遊記』の形をとるためには第三者の改訂を必要とし、呉承恩は大成者としての座から降りなければならない。或は、この反対に、山西方面にあったような旧本西遊記を用いて、呉承恩が『西遊記』を著わしたとすれば、彼は大成の域に近い作品に改訂を加えた改編者としての色彩が強い存在となる。いずれにせよ、礼節簿は嘉靖期ごろの西遊記物語を伝える重要な文献であるとともに、その作者に呉承恩を当てようとする通説を根底から揺がすものである。（第十一・十二章）

（五）

現在する最古の『西遊記』の版本は、金陵の書林、唐氏世徳堂が上梓した『新刻出像官板大字西遊記』20巻100回本である。礼節簿が鈔写された時からわずかに遅れること18年、萬暦20年（1592）に出版されたこの版本は、またたくまに世にひろまった。出版界は、射利のため、世徳堂刊本に拠って『唐僧西遊記』とか『唐三蔵出身（西遊）全伝』（楊致和編本）・『唐三蔵西遊伝』（朱鼎臣編本）とかいう繁簡さまざまな省略本・異本をつくりあげ、江湖の人士に送り届けた。『西遊記』諸刊本の紹介は、孫楷第氏が口火を切り（『中国通俗小説書目』）、太田辰夫氏に到って版本の系統化を含む詳しい整理がなされた（『西遊記の研究』）。朱鼎臣編本と楊致和編本との関係など、太田説を高く評価してそれに則るが、こと楊致和編本に関してはいくつかの点で賛同しかねるものがある。これらの諸版本の系統は、楊致和編本が楊閩斎刊本から派生した刊本とみなし、世徳堂刊本以後に置く。つまり、伝存の各版本は、世徳堂刊本が祖で、



といった系譜をたどると推測される。従来の太田説は、楊致和編本を世徳堂刊本の兄弟と想定するが、東北大学蔵の楊致和編本はそれを否定するものと思う。この点、更に楊致和編本の諸本の分析を通して詳細に検討されるべきことで、今後の課題の一つである。このような情況下に、『西遊記』は読書人の愛読書となったばかりではなく、白話文学のモデルのひとつという地位をも獲得した。『北遊記』・『南遊記』等の模倣作、『西遊補』・『続西遊記』等の続作を生み出す原動力となったほか、『西湖二集』に語られる魚籃観音のいわれとしての典拠、『金瓶梅詞話』に見える猪八戒の姿を用いたしゃれ言葉の発生源、或は、『西洋記』・『東遊記』などにその主人公が顔をのぞかせて、物語に色どりを添える役割など、多方面に影響を及ぼしている。

明末、『西遊記』の盛況はかなりのものであったが、次の清代に入るとますます広範に、かつ深層に、多様な表現形式をとって行なわれ、結果としてその存在を知らない者はないまでになった。（第十二章）

しかし、一面で、『西遊記』は前代とは異なる様相をも見せていた。その一つは、清の官憲による小説禁圧を回避すべく、道書的色彩を加え、作者に丘処機を当てて出版したこと。『西遊証道書』や『西遊真詮』といった版本は、そのような情況の産物である。やがて、これが『西遊記』の道教的神秘化への道をひらくことになる。第二には、明刊本の主要なテキストが削除した三蔵法師の出身譚を添えて、唐の太宗や孫悟空らとともに西天取経と前世の因縁を持つようにし、西天取経とそ

の関係者がすべて因果の法糸によって結ばれるように設定したこと。第三には、明刊本の冗慢な部分、或は、精緻な図などを省いて、出版上のコストダウンをはかったこと。これらが、清刊本諸版の主な特徴として指摘でき、朝野の人士もこの方向を歓迎し、明末の流布の形勢は更に、拡大への途を辿った。

一方、小説以上に中国人の生活と深い係合いにあった戯曲の世界では、小説西遊記と旧来の戯曲西遊記を主な素材として戯曲化をはかった『昇平宝筏』240齣、『進瓜記』、『江流記』などが官僚士大夫社会で創出され、皇帝の御覧に供せられた。ただし、注意すべきは、これらの戯曲テキストは、小説の内容と多少の差異をもち、同じ『西遊記』でも、いくつかの受けとり方をするのを開くもととなった。ただし、残念ながら、『進瓜記』や『江流記』などは、研究の蓄積に乏しく、『西遊記』形成史から離れて、『釣魚船』伝奇・『慈悲願』伝奇、或は中国地方劇との関係からも検討される必要があるため、今後の研究課題としたい。また、下層社会においても、『西遊記』の一場面に取材した戯曲作品が時には貸本屋などを通して読まれ、時には上演などもされ、社会の底辺層にまで浸透して行った。古い伝統をもつ影絵芝居や人形芝居も『西遊記』を主要な出し物とし、婦女子の娯楽となった。これらの表現形態も、小説の内容に忠実であったわけではない。(第十三章)

小説・戯曲以外では、茶館において説唱の『西遊記』が説話人によって語られ、年画を売る店の軒先には「西遊記画」が吊り下がり、それを聞いた、或は、購入した人々の中には、廟所へ赴いて斉天大聖孫悟空像に新年の賜福を願う者もいた。

清代の『西遊記』受容は、民間諸芸能と結合した形でそれが行なわれる傾向が強かったので、情況や時節に応じて物語に改編が加えられて行くのも、また自然の成りゆきであった。中国の民間芸能の諸形態については、李家瑞氏(『北平俗曲略』)、永尾龍造氏(『支那民俗誌』)、沢田瑞穂氏(『中国の庶民文芸』)の紹介及び『北京風俗図譜』(東北大学蔵)などを参照し、新たに知見した資料と併せて『西遊記』の展開を考察した。(第十四章)

以上のように、『西遊記』は、玄奘三蔵入寂後程遠くない時期に伝説としてその萠芽が現われ、唐・宋・元を経て、明代の後期の萬暦年間に大成した。そして、次の清代には、小説以外の多様な文芸形式に組み変えられ、官僚士大夫層から、底辺層の流民に到るまで、幅広い人々の受容を得、ついには東アジア文化圏諸国、チベット・モンゴル・ベトナム・朝鮮、そして日本にまで流布し、各国・各地域の文化に多大な影響を持って今日に到っている。

論文審査結果の要旨

中国の長篇の古典小説の多くは、特定の作者の作品ではなく、歴史的な事実を軸としてさまざまな説話が集積され、つぎつぎに潤色が加えられて長篇小説が形成されるという経過を持つ。「三国志」や「水滸伝」がそうであり、「西遊記」もまた同様である。そこでこれらの小説が形成されて

行く過程および各時期における様相を解明することが、中国小説史研究の重要な一分野となっている。

「西遊記」は唐代初期、七世紀に玄奘三蔵がインドに赴いて多量の佛典を持ち帰ったという事実と、それにまつわるさまざまな説話に端を発し、次第に成長して明代後期、十六世紀の末に長篇小説として出版される（万暦20年、1592、金陵世徳堂刊本）。このいわゆる世徳堂本を以て「西遊記」の一応の完成された姿とみなしてよいが、その後もさまざまな改編本が出版されるし、また戯曲や語り物、人形芝居のようなかたちで流布する。

この間の経過に関する研究は国内外を通じて少なくないが、それぞれ個別的、部分的な考究にとどまっている。これに対して本論文は、先行の諸研究の成果を十分に検討して、採るべきものは採り、批判すべきものは批判し、修正を加え、更に従来の研究の空白部分を埋めて、物語の発生の段階から長篇小説として完成される過程およびその後の流布の様相を、一貫した流れとして総合的に把握し、考究しているところに従来の研究を越えるものがある。

本論文は十四章より成る。第一章より三章までは、唐代におけるこの物語の成長の過程を究明する。第一章は玄奘三蔵自身の旅行記「大唐西域記」と各種の伝記資料およびそこから派生したさまざまな説話を検討し、小説に発展して行く萌芽的要素を検討する。第二章は唐代後半に三蔵説話が中国各地にひろまり、ふくらんでいくことを論ずる。第三章では三蔵説話の発展が、唐代における密教文化の流布と密接な関係があることを指摘する。この点は従来あまり論じられたことのないところで、論者の創見といってよい。

第四章は宋代において三蔵説話が集成されて行く経過を論ずる。宋代に流行した講釈の種本とみられる「大唐三蔵取経詩話」（以下「取経詩話」という）および「新彫大唐三蔵取経記」（ごく一部だけを存する）の刊本が日本に伝存することはよく知られているが、論者はこの二書のほか、さまざまな資料によって、三蔵説話が江南、特に福建地方にひろまり、この地域の説話をとりこんでふくらんで行ったことを指摘する。この点も従来あまり注意されていなかった新しい視点である。

第五章は、元代になるとかなり豊かな内容を備えた「西遊記」が存在したはずであることは従来も言われているが、そのいわゆる「元本西遊記」が、どのような内容と規模を有したかを究明する。当時高麗あるいは朝鮮において出版された中国語会話の教本、「朴通事（諺解）」などに西遊記物語が教材として利用されていることは従来も注目されて来たが、論者はこれらをはじめ同時代の種々の資料にみえる関連説話を丹念に蒐集整理し、「元本西遊記」の内容を再構成する。その結果、のちの小説「西遊記」にみえる登場人物（擬人化された動物や妖怪を含む、以下同じ）および話題の多くが、「元本西遊記」にすでにみえていたことが確認される。

第六章は清刊本「西遊証道書」にみえる元の官僚文人、虞集の序の真偽問題についての考証。つとに魯迅がこれを偽託としたのに対し、近年太田辰夫氏が真作説を提起していたが、論者はやはり偽託に違いないことを論証する。その結論はおそらく正しいが、ただ論者がこの序の末尾にしるされる虞集の籍貫および官名のしるし方を問題にして紙数を費やしている部分は、いささかの見当違

いをも含んで冗長であり、もともと真作説には無理があるので、もっと簡潔にまとめることが可能であったと思われる。

第七、八、九章は「西遊記」を構成する要素、すなわち登場人物や話題のうち、特に問題を含んでいるものを個別的に論ずる。本論文の全体は「西遊記」形成の始終を時代順にたどる構成を主としているが、この三章は経（たていと）に対する緯（よこいと）、もしくは紀伝体の本紀に対する列伝に相当する。

第七章は「西遊記」の実質上の主人公である孫悟空の渕源と発展に関する論考、渕源については諸説があるが、論者は密教系の護法神と福建地方に流布していた妖猿伝説もしくは猴王神信仰とが重なり合ったところに渕源が求められること、および宋末の「取経詩話」にみえる猴行者がその原型であるには違いないが、「遊宦紀聞」などによれば、遅くとも南宋初めには登場していたことが知られ、元代にはいわゆる「元本西遊記」の中で、後世の小説にみえる孫悟空の形象にかなり近いところまで成長していたことなどを論証する。第八章は準主役というべき猪八戒についての論考。猪八戒は宋本「取経詩話」にはみえず、「元本西遊記」の段階で登場するが、その渕源はやはり密教系の護法神に求められ、のちに道教系の神将、天蓬元帥のイメージが重なってくることを指摘する。七・八章を通じて、こうした形象の渕源を単一のモデルに求めるのではなく、種々の要素が重なり合って形成されて行くというとらえ方は、丹念に捜求された資料の豊富さとあいまって、従来の諸説に比してはるかに説得力がある。

第九章は、宋本「取経詩話」にはみえず、後世の小説の中ではかなり重要な意味をもつ唐太宗入冥物語と陳光蘂江流和尚物語の渕源と、それが「元本西遊記」にはすでに取りこまれていたに違いないことを論ずる。

第十章は明代の戯曲「楊東来先生批評西遊記」についての論考。現在の万暦刊本は作者として呉昌齢の名を掲げているが、つとに孫楷第によって、実は明初期の楊景賢の作であることが証されている。ただ後世の改訂が加わっているという疑いも提起されているが、論者は孫楷第の説を追認して楊景賢の原作そのままであるとし、従って現存の刊本は世徳堂本「西遊記」より遅れるかもしれないが、その内容は明代初期の「西遊記」の姿を伝えているとする。

第十一章は1985年に山西省長治で発見された「迎神賽社礼節簿」についての論考。この書はこの地方の収穫感謝祭の式次第の記録であり、そこで上演される隊舞戯の内容が詳細に記録されているが、その中に「西遊記」に因むものが含まれているのである（「唐僧西天取経」など四種）。そして万暦２年（1574）に鈔写されたもので、それ以前、おそらくは嘉靖隆慶ごろの「西遊記」の姿をこれによって窺うことができる。論者はこの点にいち早く着目し、その内容を整理して世徳堂本と対比しているが、その登場人物や話題はかなり世徳堂本「西遊記」に近いとし、この事実は小説「西遊記」の原作者、もしくは集大成者を呉承恩とする説に対する疑念をいっそう強めさせるとする。西遊記物語を長篇小説「西遊記」にまとめあげた人として、嘉靖期の江蘇淮安の文人、呉承恩を充てるのは、中国では魯迅が唱えて以来定説のごとくになっているが、近年わが国ではこれを疑問視

する考え方がむしろ主流となっている。呉承恩とほぼ同じころ、遠く離れた地域で小説「西遊記」とほぼ同じ内容をもつ隊舞戯が上演されていたのであるから、呉承恩原作説を疑う有力な根拠となることは確かである。

第十二章は、明代後期に世徳堂本が出版され、以後さまざまな改訂本が出版される状況を概観し、それら諸本の系列問題を論ずる。この問題については太田辰夫氏の詳細な論考があって、論者も概ねはそれに従うが、楊致和本については新しい考え方を提起する。この本は明刊本一種（「唐三蔵出身全伝」、Oxford Bodleian Library 蔵）と清刊本数種を存するが、太田氏によれば、明刊本は世徳堂本と並んで、ともに魯王府本（現存せず）にもとづいており、清刊本はすべて明刊本を祖本とするとしている。これに対し論者は、清刊本が一様でないことに着目し、諸本を詳細に対比した結果、東北大学に蔵する清刊本は現存明刊本（オクスフォード本）をもとにしているのではなく、これに先んずる別の祖本の存在を想定するべきであり、現存明刊本はその改編本であろうとの結論に達する。更に論者は世徳堂本との関係についても、祖本を同じくする兄弟関係ではなく、楊致和本は世徳堂本を修改した楊閩斎本をもとにしているであろうとする。楊閩斎本との関係は論者も断定を避けて今後の課題としているが、東北大学本が現存明刊本を祖本とするものではないという点はほとんど動かせないであろう。

第十三章、十四章は清代における「西遊記」の流布の状況を考察する。小説としては「西遊証道書」や「西遊真詮」のように、やや簡略化され、かつ道教色を帯びて流布するが、それとともに「昇平宝筏」に代表される戯曲、更に説唱文芸（歌をともなう語り物）や人形芝居、影絵芝居など、民間芸能として民衆の間に浸透し、享受される。これらについては従来ほとんど系統的に論じられたことはなく、論者の精力的な資料探求によって新たに拓かれた研究分野といってよい。

以上、本論文は「西遊記」の形成に関する従来の研究を概括するとともに、少なからぬ修正を加え、また新たな知見と考察にもとづいて空白を埋め、一千年を越えるその形成と変貌の歴史を一貫した流れとして究明しようとするものであり、その意図は相当程度に達成し得たものと認められる。今後このテーマの研究は、必ずや本論文を基礎として進展することになるであろう。

よって本論文の提出者は、文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認められる。